



厚生労働省2階の講堂にある新型コロナウイルス対策本部は深夜0時を超えても煌々こうくわとしていた。実務の司令塔はまさに不夜城で、若手から幹部まで本省内外から集められた精鋭2000人が不休で働く。「本部への招集を徴兵と呼ぶんです」とある職員が打ち明けてくれた▼対コロナはまさに戦争だ。国内では100施設以上に戦禍は広がり、中には職員らが防護服を着て軽症の利用者をケアするケースも。大規模災害を想定した福祉施設同士で助け合う仕組みも今回は機能しにくい▼戦いで重要視されるのが兵站だ。最前線の兵士に武器や食料を補給する任務のことで、対コロナではマスクや消毒薬だろうか。しかし4月末時点でも全国社会福祉協議会は福祉施設での衛生用品の不足を訴えた。同時に自治体による支援体制の明確化も求めるなど逼迫ひっばくした状況は続く▼すでにコロナ発生時に担当する「志願兵」を募った福祉施設もある。施設長は「命をかけたケアを業務命令できない」と苦しい胸の内を明かす。志願した職員には家族もいる。病院ですら起こる院内感染を福祉施設で防げるのか。不安は尽きない▼これを美談では済ましてよいのだろうか。決して逃げない福祉施設の覚悟にもっと光があたり、きちんと報われるべきである。安倍晋三首相は4月30日、緊急事態宣言の期間を延長する方針を示した。

(鮫島隆紘)